

『就実論叢』 第四六号 抜刷
就実大学・就実短期大学 二〇一七年二月二八日 発行

『南総里見八犬伝』の知論、その4

井上啓治

『南総里見八犬伝』の「知論」、その4

井 上 啓 治 (表現文化学科)

序

I 「八犬伝の知論」の基本

II 馬琴の人生観〈『大学』の知論「正心論」

III 馬琴の心情「誠意・正心の作家」

IV 「仁・知」対

V 二大世界観と「誠意・正心」

序

これまで、八犬伝論をなすにあたり、物語性・人間の性(本質)・理念思想性、これらの説話的出拠と、特に儒学原典の出拠を具体的に指摘・別抉し、その理由と意味するところの両者を論じ、もって馬琴の構想を考察してきた、

歴史小説性・理念思想性・大衆文学性の三つからできている八犬伝の、新しい解釈と享受を目指したのであった。

結果、【少年の成長】と、【英雄・武士は仁知兼備】というような、八犬伝・馬琴の二大世界観の存在を指摘してきた。

物語的魅力を分析しつつ、初発の「八犬伝と孝経・論語と史記——第一部里見の聖賢像と『封神演義』太公望像をめぐって——」^(注1)以来、「八犬伝の知」について論じてきたのであった。特に、「八犬伝、毛野の〈智〉と人性観・教育観」^(注2)・「八犬伝、毛野・房八の智と〈私情〉」^(注3)において、主要人物たちの「知」を比較した。それにより、それぞれの「聖賢並みの知」と「不全な知」を明らかにし、以降の論考も併せて「毛野・親兵衛、両天才少年の不全未熟と、挫折不遇、そして成長、完成」を論証してきたのである。

そして、前々々稿「知論1」「八犬伝の世界観、「知論」をめぐって」^(注4)において、知論の拙稿をすべて総浚えしようとしたのであった。【京師の話説】最終第百五十回【一休の足利義政公教戒】における「政道論」に続く「妖孽論」を採り上げ、その出拠「中庸」を指摘し、

これが「至誠論」「明知論」であり、「誠論」は「性（ものごとの本質）論」で、これら「至誠・明知・性」論こそ「仁知」対兼備、即人間の理想」なる『中庸』の知論』であるを指摘、考察したのであった。

これはそのまま、「性美しき」仁の犬士親兵衛・知の犬士毛野、即ち「仁と知」これこそ八犬伝に託した馬琴の理想であり、親兵衛・毛野に託した『少年の成長』に関わる理念思想であり、八犬伝研究におけるもっとも大きな問題ゆえ、「課題①」とし、これまで同様、折に触れ、論じてゆくとしたのであった。

I 「八犬伝の知論」の基本

本研究では、八犬伝の知論として、殊に以下の三か所を考えてきた。それは、馬琴が、ことさらに「知」等について、まとめて言表化しているゆえである。

(1) 第六十七回巻頭、第九輯【下駄下套之中後序】

(2) 第八十九回、湯島天神境内【毛野の独白・内部世界】

(3) 第五百十回、京師の話説最終【一休の足利義政公教戒】

これらの、知論に該当する本文を、すべて分析して番号を付け、分類し、考察してきた。その結果は、前々稿知論²・前稿知論³に明らかに示した。

まず、〈理念思想面〉で明らかにしたことを示すと、前稿では、「馬琴の知論における定義①～⑥」を示した後、馬琴の知論の中心と思

われる(1)【下駄下套之中後序】(下の下の下の中、後序と略す)を中心に考察した結果、「馬琴の知論の結論①②③④」を導き、さらにこれらから「馬琴の知論の結論①②③④(儒仏相補)」に短くまとめた。そして、この四つの結論から、上記(2)【毛野の独白・内部世界】の核心たる「性の美論」に触れ、それに関する馬琴の論拠儒学原典『中庸』を考察した結果、『中庸』の知論の基本①②を得た。次いで、(2)の【毛野の独白・内部世界】の該当テキストを考察することで、同じく短い形で「馬琴の知論の結論⑤⑥(儒学)」を示すことができた。

最後に、馬琴の〈心情面〉に関して二点、(1)【下の下の下の中後序】の前々稿に付けた番号で言うところのX4と、(3)【一休の足利義政公教戒】の同じく番号で言うところの⑥の③、この両者に共通に見える馬琴の強い心情、それは明らかに儒学理念思想「正心論」に通じている、と思われたが、「続稿に期す」とした。

本稿では、この「正心論」を論ずる。

また、これまでの「八犬伝の知論の研究」で、簡略に示してきたものの内の一つ二つ、殊に(1)のX2について、また(1)のX3・①についても詳細な考察を追加し、もって初発の理念思想「仁知」対論」に戻ることになるか。

II 馬琴の人生観(『大学』の知論「正心論」)

さて、今回ももっとも注目したいのは、なんとといっても上記、(3)の

⑥の①3と思われる。引いてみる。傍線部①3とその後統部に、さらにそれに続く⑦3も紹介しておく。

⑥③庸才なるも、怒いに漢学びして、眼其の用を做すときは、心高慢り己に惚れて、博きに誇り俗を欺き、利を尋ね名を鬻ぎて、反つて身を脩め心を正しくし、家を成し、道を行ふ、真の学問には疎かにて、只世俗を非とし賤しめて、身は是れ魔界に在るを思はず、甚だしきに至りては、乱を起こして刑せられ、衆と争うて兵せらる。かくの如き白物の、悪名を貽すが如きは、瞳子なかりし這の虎の、眼に点して遂に那の禍事を惹き出せしと、亦た年を同じくして論すべし。嗚呼造化の小兒の手段玄妙、禎祥も徒に興らず、妖月孽も徒に起こらず。事勸懲に係る所、誰か這の深き意を知らんや。是に由りてこれを觀れば、這の虎実に巨勢金岡の肉筆なるや、神明仏陀の灵画なるか、人も得知らず、我も得知らず。知らぬを強いて説を做して、原故を究めんと欲するは、是惑いのみ。蓋し虎の猛悪なるも、瞳なければ、人を傷らず。⑦3人の性の美しからぬも、見ず知らざれば、倒かに易かり。然れば瞽者は、反つて具眼の俗に勝りて、富戸あり、博識ありて、家を興すも尠からず。眼目の資助は、人によるべし。

ここは、傍線の波線部に注目すべきと提案したい。いつもの馬琴の公憤・慷慨の如くと思われるようが、実はここには核心的な知論が含

まれていると考えている。それは、『『大学』の知論』とでもいえるものだと思われる。この(3)の⑥の①3の傍線部の儒学理念を示すと、

脩身、正心、成家、

と思われる。これは『『大学』の冒頭部』にあつて、古来もつとも著名なところであろうか。^{注7}書き下す。

古えの明德を天下に明らかにせんと欲せし者は、先ず其の国を治めたり。

其の国を治めんと欲せし者は、先ず其の家を齊えたり。

其の家を齊えんと欲せし者は、先ず其の身を脩めたり。

其の身を脩めんと欲せし者は、先ず其の心を正しくせり。

其の心を正しくせんと欲せし者は、先ず其の意を誠にしり。

其の意を誠にしんと欲せし者は、先ず其の知を致せり。

知を致すは物を格すに在りき。

物格しくして后、知至る。

知至りて后、意誠なり。

意誠にして后、心正し。

心正しくして后、身脩まる。

身脩まりて后、家齊う。

家齊いて后、国治まる。

国治まりて后、天下平かなり。

天子より以て庶人に至るまで、一に是れ皆、身を脩むるを以て本と為す。

其の本乱れて未治まる者は、否らず。

其の厚き所の者薄くして、其の薄き所の者厚きは、未まだ之れ有らざれば也。

これを本を知ると謂い、此れを知の至りと謂う也。

これが、第二節の全てである。上記八犬伝(3)の⑥の①③傍線部「修身・正心・成家」は、朱子が大学の「八条目」と名付けた、「平天下・治国・齊家・修身・正心・誠意・致知・格物」、この傍線部の三条ではないか。この八条は一般に、前半の「修身・齊家・治国・平天下」で知られているように、儒学の政治政道観の基本理念として流布していると思われるが、出拠は、この『礼記』「大学」である。

書き出しの「大学の道は、明德を明らかにするに在り。民に親しむに在り。至善に止どまるに在り」に始まる僅か五十八字の第一段第一節が、「明德・親民・至善」を掲げて、学問完成、大学の道を説くのに対し、この第二節では、明德は、人がものごとを格しく理解して初めて、知を極めることができ、誠意・正心となり善良に身修まる、とまず一人一人の為すべきや具体的な行為を述べる。

そうして、個人がかく為してはじめて、家族・国家・天下へと及ぶのである。

つまり、最初の個人に関する五条目ののち、家・国・天下へと至るのだ、と強調していると思われる。

さて、「格物・致知・誠意・正心、修身・齊家・治国・平天下」と覚えていたが、八目の内、三つがさり気なく馬琴の烈しい慷慨に入っている、素通りしてしまいがちである。即ち、この(3)の⑥の①③は、明らかに馬琴の意識した『大学』の知論であると思われる。

何故なら、引用部前半七行は、「明德天下(平天下)・治国、齊家・修身、正心・誠意、致知・格物」であって、上記「朱子八条目」である。問題は、その後半の七行であり、やはり「格物・致知、誠意・正心、修身・齊家、治国・平天下」となる。つまり、この『大学』冒頭部十四行は、第一目から第八目へ、そのまま第八目から第一目へと繰り返している。この八条目の重要性が知れよう。

抑々、折り返しに気づけば、いつそうやはり注目されるではないか。「致知・格物」、そして折り返して「格物・致知」と始まって、「①知至りて後、意、誠なり。意、誠にして後、心正し。心正しくして後、身、修まる。身修まりて後、家齊う。。。。」。つまり「致知・誠意・正心・修身・齊家」と。「知」から始まるとも読めるかもしれぬ。「知」が強く意識されるかもしれぬ。この波線部⑤を注目しておこう。そして馬琴は、(3)の⑥の①③に、「修身・正心・成家」と示した。即ち、波線部⑤のあたりを馬琴も強く意識していたのかもしれない。もし、そうとすれば、この⑥の①③以下はきわめて重要ではない

か。この第五百十回、前々稿知論^(注8)2で(3)「一休和尚、室町前將軍足利義政批判・教戒」とし、前々々稿知論^(注9)1で、「政道論の場」かと思われようが、「ここには「知論」も交えてあった。(2)(3)(6)を中心に前述『中庸』の知論」に拠りつつ論ずることになるうか」としたが、確かにその(6)で、しかし、同じ『礼記』でも「大学」の方であった。「誠の中庸・知の大学」というに相応しい。この(3)「一休、足利義政公教戒」の(6)は、以下のように始まるのである。

余るに這の無瞳の画虎に、人其の眼に点ぜしより、忽地に暴れ出でて、世の人を恐嚇せしを、よく思えば相似たる事あり。

つまり「眼の無い妖虎に眼が附いて世間に迷惑をかけた」、「これによく似たものが世間にある」。そしてこの(6)(1)(3)「無理に学問して、眼の力が働いてしまつて、なまじいに知識が付き、高慢となつて墮落し尽す」。

ここは実は、重要なことを示しているのではないか。前述波線部の(5)に注目したい。上に論じてきた如く、(3)の(6)の(1)(3)は、まさに「『大学』の知論」である。即ち(5)、「知至」と「誠」になる、すると「心正し」くなり、「身、修まる」、つまり逆に言うと、「誠」でないと、いくら「知識が附」いても「明知」ではなく「暗知」となり、「正心」にならず「修身」できぬ。

まさしく、この(6)(1)(3)、「無理な学問・なまじいな知識」で「高慢・自惚れ」「自誇り」となり、人を「欺き」、「利」「売名」を求め、「真

の学問を疎かに」し、「身は、魔界」、これらに重なるう。

即ち、「至誠・明知・性・仁知」という『中庸』の知論」は、この(3)の(6)の(1)(3)「『大学』の知論」に通じていた。もちろん、元はともに『礼記』であり、宜なるかな、であるが、「誠・知・性・仁」が直接『大学』の知論」と結びついたことは重要であり、留意しておくべきと思われる。

さて、この(6)の(1)(3)の後ろを紹介しつつ、指摘すると、「墮落して身は魔界に墮ちたこともわからぬ」まま、「甚だしい場合には叛乱・戦争を起こして刑せられ悪名を遺す」のは、「その、なまじいに眼がついたせいで世間に災厄を起こした妖虎の例と同列だ」。「自然の采配は玄妙だ、吉祥も妖孽も理由なくは起きない。全ては勸懲に関わるところで、いったい誰がこの深意を分かってくれているだろうか」。

「以上により考えてみると、この虎が本当に巨勢金岡の自筆なのか神仏による霊画なのか、誰にも分からない」。「分からないものを無理やり説を作つて、こじつけてでも理由を捜そうとするのは、是は惑いでしかない」。「思うに、虎で猛悪であっても、眼が無ければ、人を傷つけない」。そして、続く傍線部(7)(3)。

人の性の美しからぬも、見ず知らざれば、倒かに易かり。然れば瞽者は、反つて具眼の俗に勝りて、富戸あり、博識ありて、家を興すも尠からず。

とあって、最後同⑦、再び直接義政公に語って、一休和尚は去るのである。

つまり、最後、「性の美論」に至って終るのであった。即ち、まとめてみると、この③の⑥は、「本来眼の無い妖虎に眼を附けたために災厄が起こる説から始まり、人間も同じで、なまじいに学問して、たまたま眼が働いてしまつて知識が附いてしまい、高慢墮落し、中には叛乱戦争を起こし、つまり災厄を起こす」という話の後、「性の美」論で終わるのである。

即ち、「眼を附けたら災厄を起こした妖虎・眼が働いて高慢墮落して災厄を起こした人間、ともに同列だ」という話。ところで、これは「眼が附く開く・眼が働き知識が附く」ということで「知論」であるが、また、「なまじいに知識がついてしまつた人間が墮落する」という本質論の「性論」でもあろうし「人性論」でもあろう、そして最後「性の美」論で終える、ということになる。即ち、(3)の⑥「『大学』の知論」は、やはり、前稿で論じた『中庸』に通じる「誠論・知論・性論」と同じではないか。あとは、これに「仁・知・対性」が加わるだけである。

「誠の『中庸』・『知の『大学』』と言う。前稿までで見た如く、馬琴の内部には『論語』同様『中庸』が大きく座を占め、「誠・知・仁・性」として八犬伝の物語世界に明白に言表化され、また滲み出ていた。今回、そこに『大学』が加わつた。「格物致知」の論拠で

ある『大学』である。八条目の後半「修身・齐家・治国・平天下」は流布しているようし、前半の冒頭二句「格物・致知」も同様である。だが、残る二句「誠意・正心」は、慣用句のように日本人の高年世代の脳裏には刻まれていようが、普通は案外知られていない。だが、この(3)の⑥の⑬⑭に、さり気なく使われた。

そしてそれは、第百六十七回巻頭、(1)「下の下の中後序」の㊦④にもあつた。

或いは又良知にして心正しく、博く学び得て奇才あるも、命凶にして用いられず、且つ勢利に附かず、富貴を羨まず、

一方、この世界には逆に、「良知にして心正しく」生きる人がいる。日本の隅に、「良知にして、心正しく生きている者がいるぞ」との宣言であつたかもしれぬ、そう思われるのである。このX4については、次節Ⅲで論ずる。

Ⅲ 馬琴の心情「誠意・正心の作家」

以下、馬琴の「正心論」に関わるものを、「八犬伝の知論三者」(1)(2)(3)より引いてみよう。その「馬琴の知論の代表」と思われる第三部、第九輯、(1)「下の下の中後序」(第百六十七回の巻頭)と、(2)「毛野の物思い・内部世界吐露と馬琴の教育観の代表」と考えられる第八十九回と、この「京師の話説」末部第百五十回、(3)「一休和尚による足利將軍義政批判教戒」、これら三者の該当部、知論に

関わるるところを前々稿で番号を付けて全て分類し、(1)(2)(3)三者を総合的に考察し、「馬琴の知論の前提」と「馬琴の上知論」という二つの分析を行なった。次いで前稿でもこの三者をまとめて考察し、「馬琴の知論における定義」「馬琴の知論」「馬琴の性美論の前提」「中庸」の知論」「馬琴の性の美論、即知論」と考察を行なった。

上述したように、前々稿の「馬琴の上知論」で(3)の⑥①③に注目し、そして前稿の「馬琴の知論」では(1)のX4に注目した。「正心論」に関わる(1)のX3・X4、(2)の①②と⑦②と、(3)の⑥①③と⑦②であるが、⑥はすでにⅡ節で論じたゆえ、ここでは、前二者を考察しよう。

さて、まず(1)「下の下の中後序」を引くが、何度も言う通り、難解な文義が続く。私に謂うところの「知論」だと考えられる。ここも難解すぎるゆえ、まったく読解されてこなかったのか、そもそも、まともに触れられてこなかったところ、ということであろう。引いた後、考察を加えてみよう。番号・傍線等は、例によって、前々稿^{〔註10〕}で分類した際に付けたものである。

☒3 【然るに智に上智あり、邪智あり。上智は、良善の事に用いて、毫も奸悪の事に移らず。進退必ず度に称うて、動くといへども跌かず。是を賢才睿智という。才は智の乖(垂?)なる者也。是を以て難しとす。才なく智なきは、則ち下愚なり。】

◎1 又邪智は奸悪の事に用いて、仁義の心なく、進むを知り

て退くことを思わず、動くときは人に害あり。奸民盗兇の才あれは、多く是なり。

☒4 【或いは又良知にして心正しく、博く学び得て奇才あれども、命凶にして用いられず、且つ勢利に附かず、富貴を羨まざり、同好同志の友稀なれば、但いにしへの聖賢を師とし友として、隱居放言、春日秋夜を長しとせず、常に書を著して、もてみづから其の智を籠にしぬる者あり。元の羅貫中、清の李笠翁是に庶しとせんか。是よりの下、唐山にて云う稗官者流、国俗の云う戯作者是なり。】

これは「上知・邪知論」であるが、◎1傍線部によって、「奸悪」「仁義の心なく」「人に害」「奸民盗兇」が、「悪人」「悪意悪心」といった悪のイメージを浮かび上がらせよう。まさに『大学』の「正心論」の対極であることが知れよう。

しかも、◎1は作家的経験から得た認識のようにも見えようが、やはり残酷・薄幸の少年時代を送られた馬琴の、実人生体験を浮かび上がらせてくれると思われるのである。従って◎1は、具体的な悪の「性」「人性」を想い起こしつつ記し、その直後、X4の波線部「良知にして心正しく」と述べたのだ。ここに『大学』「正心論」の持つ意味の大きさを知るのである。これもまた、馬琴の「心の真実、心の叫び」であったと思うのである。

さらに、これに続くのが、「博学・奇才」だが、「命、凶」にして

世に「用いられ」ぬ自分馬琴がいる。だが、決して、阿りはすまい、せぬ。「勢利に附かず」「富貴を羨まず」に生きるのだ。(世に對し、人に對し、知と真理に對し、「誠意・正心」に生きる)と言っているのだ。

そして、「同好同志の友、稀」ゆえに、八先王・聖人など中国「古代の聖賢を師とし友とし」て、日々を過ごしている。これこそが、日本の「誠意・正心」なる文人知識人の生である、私馬琴の生き方であるとの宣言であらう。

そして、「常に書を著し」、もって「みづから其の智を籠にし」て世に明らかにする、つまり〈物語という形で、人々を愉しませることと、歴史と、理念哲学思想と、これら三つを込めて、今の世に、特に後世に明らかにしようとする偉大な作家たち〉がいる、「中国の羅貫中・李笠翁、以下、中国稗官者稗史作家」に日本の戯作者である、と。もちろん、馬琴は、他の作家、いわゆる戯作者なぞ相手にしていない。

「日本の戯作者」とは馬琴である。〈百年後の知音を俟ち〉て後世の「誠意・正心」の人のために「隱微」に小説に思想を込める真の作家、「誠意・正心」の作家は自分しかいない〉という自負が、明らかにみてとれよう。

まことに「上知・邪知論」は「上知・良善論」となり、「良知・正心論」であったと思われるのである。

第八十九回、(2)は【毛野の独白・内部世界】を示す極めて重要なところだと考えているが、ここもまったく取り上げられて来なかったと思われる。ここも、毛野のみならず、馬琴の身上・心情吐露が明白に示されていると思われるが、本稿の論旨、八犬伝の「正心論」に関わるところのみ引いてみよう。その場面を次に引く。

(2)然るにても那の鯽三は、心真実なる今番の挙動、①2世に万巻の書を読むものの、尊大にして世事に疎く、徒だ広博に誇れども、異朝の事のみ細しくして、皇国の故実は夢にも知らず、口に経伝の語句を解けども、心術は一文不通の、俗を去ること遠くもあらずや、その行状を伝え聞けば、慕わしからぬも世にはあらんを、那の鯽三に比れば、実に雲壤の差別あり。

是を思えば ⑦2性の美は、自然の美にして、造らず飾らず、学びて後に才に知る、文字の間になきものにて、至善の人といいつべし。和も漢も、昔も今も、忠臣孝子、義士節婦の、文字なきも多かるは、学ぶに優る世の人の、人の上なる人也けり。

これまで、この(2)の①2は、世の似非学者・似非知識人批判と指摘してきた。だが、「性」「性美」と「大学」の知論が結びついた今、この①2・⑦2もまた「正心論」と通じていると考えられる。「致知・誠意・正心・修身」が想起されよう。

即ち、「誠意・正心」であれば、「修身」して「真の知に至」るのであって、「万巻の書を読むものの、心術は一文不通」の①2に

は決してなることなく、「性の美、自然の美、至善の人、人の上なる人」㉗㉘に近づくのだ、と。

IV 「仁・知一対」

さて、ここでは、前稿までで詳細に論じてこなかった(Ⅰ)のX2とX1を考察しよう。

「智慧」に関する「仏説の知論」を短く示す㉙Ⅰの、その後ろにさらに数行、次のように「仏説の知論」㉚Ⅱが続く。これまでも触れてきたが、全文訳してこなかったゆえ、ここで訳す。

思うに智と慧と、互いに助けあつて用をなすのは、譬えば、人の身に魂と魄とが有るようなものである。魂はすなわち「心神たましい」であり、魄とはすなわち「神系しんけい」である。人の心が欲することは、魄「神系しんけい」の助けでなければ、手を動かさし足を運ばせ、動靜言動、坐臥行止は一つも意の如くならない。智慧と才幹と互いに助けあつて善く致す、ということがあるのも、是の理りをもつて知ることができるだけである。

これを分かりやすく釈してみよう。ここでは、「魂魄」という時、各辞典類ではおおよそ精神を司る気・霊の魂と、肉体を司る気・霊の魄、といった魂と魄と、精神と肉体と二元論的な説明となっている、その説明を解釈に用いてみよう。

思うに、智と慧と互いに協力補完し合つて用をなす、働いている、

というのは、譬えて言うと、人に魂と魄とが有るようなものである。魂とはつまり「心神(たましい)」であり、魄とはつまり「神系(しんけい)」である。人の心(たましい・精神)が欲し望むことは、魄(肉体神経・肉体を司る気)の助けでなかったならば、手を動かしたり足を動かしたり、動靜も言動も、行住(行く・とどまる)も坐臥(座る・横になる)も、つまり、日常生活全ての言動起居の行動動作が一つも自由にならない、思うとおりにならない。魂と魄とが協力して、人間の全ての行為・営為を実現しているのである。「智慧と才幹と、互いに補完協力して善く致す」ということがあるのも、是の魂と魄、精神と肉体の補完協力で精神の望むことを実現するという道理真理によって理解することができる。

以上であるが、おおよそ分かりやすく論が進む。智と慧と、魄と魂と、二元風に対応している、というように。

ただし、そのためには智と慧について、ある程度の理解が必要であった。それは、その前に説いてあった。㉛Ⅰと㉜Ⅰの間、㉝Ⅰである。引く。

格物致知は、則ち、学者の先務也。雖然も、是を知る而已にして、慧なき者は悟るに由なく、才なきものは智を致すこと得ならず。この故に智慧と云い、才智という。

儒学・仏学混交で、解釈きわめて困難、難解だが、前々稿での訳をここで修補して、釈し直してみよう。

格物致知、ものごとを正して智をきわめる、明晰な智を得るというのは、学者が何の仕事よりも先に努めなければならぬ任務である。しかしそうはいつでも、知るだけにとどめてしまつて、慧（その奥にある真理・真実を究め、受けとめる力）のない者は、悟りたくともその方法がないし、才（智の用、働き、技術）のない者は、智を致す、智をきわめて明晰な智を得る、ものごとの本質と深遠なる認識にいたることはできない。だから、才の目標である致知と、致知と同様の悟ることに必要な力の慧とを併せて智慧と云い、また、致知に必要な用・働きの才と致知の性・本質たる智、明晰にして得る智とを併せて才智というのである。

X1をこのように、改めて解釈してみた。

このX1において、仏学では「智と慧」が中心だが、儒学理念、用語としては、「知」「才」「才知」が根本として扱われているゆえに難しい。それとともに、これに続く、上記「智慧・魂魄説」のX2と、「上知・邪知、良善・奸悪、才知」のX3と◎1も、合わせて考えねばならないだろう。

前引X3の「進退必ず度に称う・動くといえども跌かず」が注目される。同じく前引◎1の真ん中の「進むを知りて退くことを思わず、動くときは人に害あり」に類似しているではないか。「進退必

ず度に称う、……」など、具体的な行為を想像・引用せねばなるまいが、儒学原典から引くのは難しい。ただ、かつて拙稿「八犬伝第一部、刺客・軍師・聖賢」で里見義実と軍師金碗八郎の「智略・叡智」を対比したことがある。その小題は、「軍師における〈智・仁〉と『論語』『史記』『八犬伝』」であった。今、本稿に必要な関連部のみ採りあげることにする。

八犬伝第二輯第十一回、八房犬に騎つて富山に消えた伏姫を思つて病床に伏した妻五十子に、姫の安否だけでも調べてほしいとかき口説かれ、受諾した後、嫡男で兄の義成に自分が行くと訴えられた場面である。

和殿がごときは血気の勇のみ。智ある人は事に臨で、おそれて謀を好むといわずや。父母在すときは、遠く遊ばず。況危きに近くをや。

勇と智と謀が言及されるも、「勇のみ」は否定され、「智と謀」が評価されており、馬琴は智と謀を、ある意味、いくらか一体とみていたようである。「謀」という言葉は、現在の否定的な意味合いとは異なり、八犬伝ではそのようなことはなく、『史記』では価値ある行為として用いられている。また、「勇のみ」の出拠は『論語』と思われる。

子三軍を行らば、則ち誰と與にせんと。子曰く、暴虎馮河し、死して悔ゆる無き者は、我與にせざるなり。必ずや事に臨みて

懼れ、謀を好くして成さん者なりと。

積す。

もし大軍を動かすとしたら、いったい誰と共にするかと問うと、孔子は、虎を素手で打ったり黄河を徒歩で渡ろうとして、死ぬことになっても後悔しないような者とは、私は行動を共にしない。必ず、事に臨んでは懼れている如く慎重に、十分に計画を立てて実行し成功させるような思慮深い者、智者と行動を共にしたい。

これこそ、上述[X3]及びそれに続く[C1]であろう。X3の「進退必ず度に称う・動くといえども跌かず」ではないか。即ち、「智」である。つまり、物語に沿って言う、「匹夫の勇」「血氣の勇」では駄目だ、「智者・賢者」でないと、命は預けられない、「智者こそ度に称った進退をすることができる・行動しても致命的な失敗をしない」ということである。

さらに、これは[X3]の対、[X3]の直後に続く[C1]の中の、「進むを知りて退くことを思わず、動くときは人に害あり。」と粗同じではないか。すると[C1]は、「仁義」が問題となるが、「義」は正しく生きることであろう。そこで「仁」だが、上記の智と勇に絡めて考える時、ただちに想起するのは、「智・仁・勇の三徳」であり、「仁・智一対」である。拙稿「八犬伝の根底世界」^[注12]に詳述したゆえ、また、

本稿の論旨からずれるゆえ、ここでは触れないが、儒学的には理想の英雄像、完成された理想像のことである。ここでは、『論語』に説かれるうちの一つ、広く知られているであろう「仁は忠恕、まごころ・思いやり」と、「仁・知の一対性」の二つを確認しておこう。また、『論語』「憲問第十四」では、「仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず」とされる。仁あってこそその勇を示している。知と勇が示され、仁と勇も示された。では、知と仁は、というと、これももちろん『論語』にあった。「里仁第四」冒頭である。

子曰く、仁に里るを美となす。択びて仁に処らずんば、焉んぞ知たるを得ん。

仁に居る居ないの選択は各人の自由だが、仁の立場を扱ばないとすれば、どうして真実の知・叡知あるものとすることができようか。即ち、「真の知とは常に仁を意識・選択して考え行動する人にしかない」というような意味と考えられよう。即ち、やはり「仁・知一対」を言っているのである。

さて、以上IV節でX1・X2を考察し、続けて[C1]も、対のX3も、詳細に考察することができた。

V 二大世界観と「誠意・正心」

「仁」も「義」も、いずれも「性の徳」、本質の顕れであり、「正心」に通じていた。理念思想として理想の二大世界観と考えている「仁

知一対兼備】した【少年の成長】に、「正心」こそ、「誠意・まごころ」こそ、必須であった。

少年時代・青年時代に、いな、幼年時代から残酷・薄幸の生を強いられてきた馬琴は知った、仁も義も、礼も知も忠も信も、孝も悌も、無残に踏みにじられることを。

この現実を覆すのは、八犬伝という壮大な超長編世界において、「まごころ真心」「正心」の、理念・理想しかなかった、そう思われるのである。

注

- 1 高田衛編『復興する八犬伝』、平20、勉誠出版。
- 2 『就実表現文化』2号（通巻第28号）、平19・12。
- 3 『就実論叢』37号、平20・2。
- 4 『就実表現文化』8号、平26・1。
- 5 「続・八犬伝の知論」（『就実論叢』44号、平27・2）。
- 6 「続々・八犬伝の「知論」（『就実論叢』45号、平28・2）。
- 7 ここは『大学』の第一段第二節だが、八条目が七句七句で折り返して繰り返され、「天子から庶人まで人は皆、修身を本とすべきで……人はそれを知るべきで、これこそ知の至りというのである」といふふうが続く四句で終えるのである。つまり、個人の格物致知・誠意正心・修身こそが、知に至る道だということである。

8 注5に同じ。

9 注4に同じ。

10 注5に同じ。

11 『就実表現文化』1号（通巻27号）、平18・12。

12 『就実論叢』36号、平19・2。